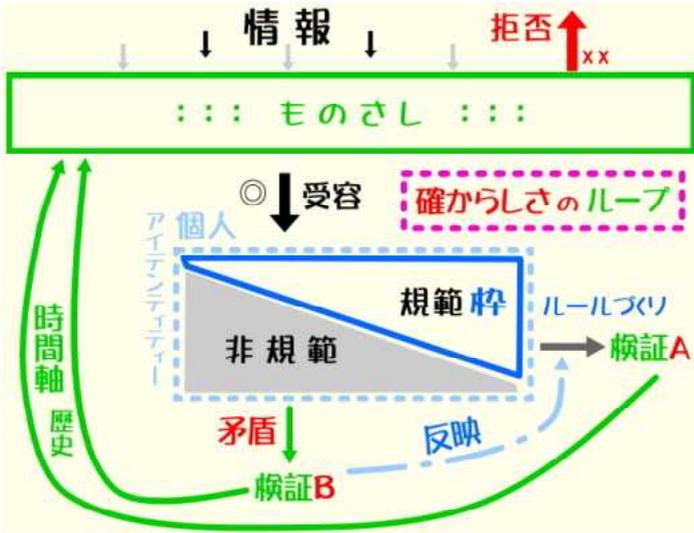


このシリーズの記事について、その信憑性は、「信頼しても信用するな」を心得、確認するスキルを身につけよう。



## 枠組みを見直す : 「正しい」を疑う



情報を自身の「ものさし」で、はかる

拒否・無視 すると  
それっきりで、関係性はなくなる。

受容することは → 関係性をもとうとする。しかしながら……

受容で進む方向は「個人」

同意 (規範枠)

受容しても……可否は別

◎ 受け入れる

+ 実践に向けて、ルールや計画の作成、法や規則に基づく。

不同意 (非規範)

XX + 議論をすることになる。

+ 同意したとしても、内心において、

積極的に受け入れたわけでない場合もある。

+ 矛盾や疑問が生じる。これをどう解決するか。

++ ここにボランティア活動をあてはめることが可能だ。

子どもや学生の場合、社会参加・体験に相当する。

検証

検証をAまたはBで行う。検証Bは実践に反映される可能性あり。

検証A・Bは、ものさしに反映され、ループを完成させる。

♪ 検証B と同調圧力

→次ページ

拒否 (無視) ではループができない。受け入れることを優先しよう。

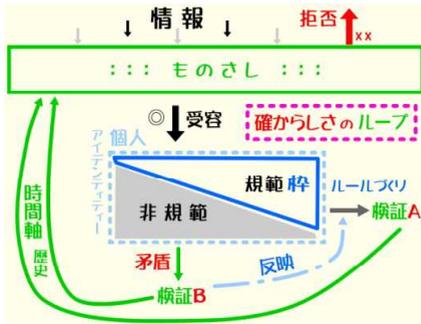
保育は福祉の仕事である。福祉を政策等で実行するとき（法や条例等によるため）線引き・枠組みを避けて通れない。業務は「枠」の中で執行することになる。しかし、それがイコール「福祉」ではない。

福祉に携わるとき、「個人」としては「規範枠・非規範」の両方に立ち位置をおくようにと、わたしは要望している。つまり、悩みながら苦悶しながら仕事をするようになる。それが「福祉」を選ぶということなのだ——と。

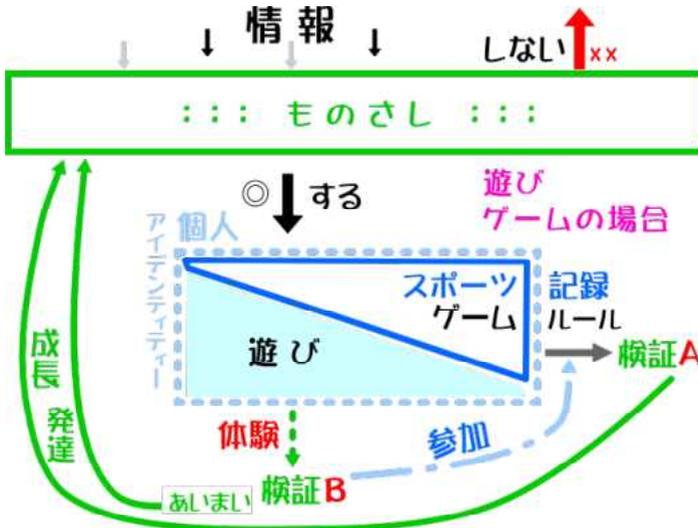
### ♪ 検証Bと同調圧力

矛盾を感じることもあっても検証Bが十分でない場合、変化を望まない傾向になる。あるいは、同調圧力によってルール強化に向かう。

→web参照 「矛盾」と共存する（内山節）



「遊び」が足りないと、「規範枠」の領域が相対的に大きくなり、ものさしに戻るループ2本のうち片方（検証Bルート）が弱くなる。





## 「正しい」を疑う

ものごとを考えると、何が正しくてそうでないか、となりがちだ。子育ては、いのちとしあわせが優先され、「正しい」を押しつけられては不愉快になることもある。

家庭での子育ては一人あるいは二人あるいは三人だ。もっとにぎやかなおうちもあるだろう。それでも、保育室の10人、20人ということはない。家庭での子育ては「もちあがり」。保育室では年度ごとに先生が同じか違ったりする。保育室の先生にとって「正しい」ことが、家庭の子育てでは必ずしも必要でないか、ある家庭では合わないかもしれない。

「家庭の子育て」を「保育室の先生」に託したり、その逆もない。しかし、このことはとてもむずかしい。

行政は「子育て支援」の目的で様々な施策を行う。主体は親（保護者）であり子どもだ。行政はあくまで「支援」の立場だ。

「保育」の仕事でもものごとを考えているとき、できるだけ教条的にならないようにしているつもりでも、規範や理論を求めて、やかましくなりそうな自分がいる。

「だまされたい」と思う者はいない。

だまされぬよう、ヨウジンする

—— どうやって？ ——

だまされない処し方は、だまされてみるのが最も確かな方法ではないか。

だまされないよう身構えるのではなく、「まず信用しよう。この人にならだまされてもかまわない。」そういう信頼関係をつくりあげようとする心・実践が先行してもよいのでは——と、考える。リスクの少ないときから、信頼関係を築く訓練が必要だろう。

「知ってる？」の問いは、嘘うその体験を誘発する。

# 子ども（幼児）は「正答」を求めている

[問題] 次のうち、正しいのはどれか？

1. 地球のまわる速さは、アリの歩く速さより遅い。
2. 地球のまわる速さは、アリの歩く速さより速いが、自転車より遅い。
3. 地球のまわる速さは、自転車より速いが新幹線より遅い。
4. 地球のまわる速さは、新幹線より速いが飛行機より遅い。
5. 地球のまわる速さは、飛行機より速い。

この問いを5歳児、保育園の年長さんに試したことがある。「アリより遅いと思う人、手をあげて」「アリより速いと思う人、手をあげて」などと問いかけていくと、すぐさま手があがる。自分とは違う考えの人たちがいると気づくと「エーッ？」と歓声もあげる。何を根拠に考えるのか分からないが、どの選択肢にも手があがる。

地球がまわっているらしいけれど、動いている実感が無い。アリより遅いと思っても「間違いではない」。

問われていることに「正答」というものがあるとしても、合理的な説明ができるならば「正答」とは違う説を否定する根拠はない。「正答以外を間違い」としてしまうと、ものごとを考えなくなってしまう。

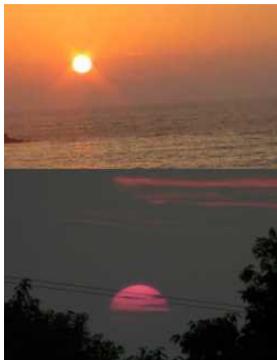
アリ、自転車、飛行機、……。クイズ形式にすると、考えるヒントになって楽しい。でもねえ、新幹線や飛行機と比べ始めるといことは、実感からますます離れると思いませんか？

おとなは計算を始める。地球の直径は？ 数学や理科は苦手と、早々と答えを期待する。

地球が1日1回転することで、昼と夜が1回ずつやってくる。だったら、回転するのをやめてもらって、自分の足で昼と夜を作ってみる！

つまり、1日で地球を一周すればいいわけだ！ ……ということは、歩いては無理で、速いものに乗りなくてはならないね。

幼児に「目をつぶってごらん」と誘う。「なんか動いている感じがするでしょう」とさらに誘惑する。「どっちに動いている。手で教えて！」と無茶なことを言っても、思い思いに手が方角を示してくれる。この遊びはここで終わる。正答は言わない。理解させる方法がない。動いていることを確かめられたので満足満足。子どもらは「なんでえー」と答えを求める表情をするが、これでおしまいにする。



資料通番01..ver.01 The Renaissance of Childhood 2024.2.4

枠組みを見直す / 「正しい」を疑う

山田利行

拡散歓迎 複写可（許諾無用）

<https://193pub.com/>